

(一九九八)。狩獵、農耕、牧畜を複合して営んでいた女真の住居利用は、まさにそうした状況であつたであろう。

関小雲・王宏剛『鄂倫春族薩滿教調査』第四章第四節三(一九九八)、
『オロチョン族のシャーマン』黄強・高柳信夫等訳、萩原秀三郎監訳、
第二章第六節一(一九九九)

鳥山喜一『北滿の二大古都址—東京城と白城』京城帝国大学滿蒙文化研究会報告第二冊(一九三五)、園田一亀『吉林・滨江兩省に於ける金代の史蹟』滿洲国古蹟古物調査報告第四編(一九四二)

前掲石橋氏『北平の薩滿教に就て』第八章

註(2)に同じ。

註(4)に同じ。

金啓琮『滿族的歴史与生活—三家子屯調査報告』(一九八一)

註(2)に同じ。

註(26)に同じ。

満人が北炕よりも南炕を尊んだことは、清代の諸地誌に見え、前掲赤松・秋葉氏『滿蒙の民族と宗教』第四章第二節や前掲金氏『滿族的歴史与生活』第二章にも記録されている。但しこれは満人の一般的傾向であり、すべての満人がそうしていた訳ではない。清の楊賓撰『柳辺紀略』には、寧古塔の習俗として、南の炕が最上の位置とされ、次が西、そして北の順であつたことが書かれている。また前掲覃氏等編・伊藤氏監訳『中国少数民族の信仰と習俗』上巻、滿族の章には、解放直前まで黒龍江省愛輝県大五家子の満人は西炕の次に北炕を尊び、西炕と北炕には決して死者を置かなかつたと記されている。

前掲王氏・金氏『滿族民俗文化論』は、満人が北を敬うのは北方が祖先発祥の地であるためという。満人の西方尚尊についても述べているが、その理由については説明がない。

— 一般教養 —

- (7) 拙稿「北魏における西郊について―鮮卑拓跋部の二つの祭天形態が語るもの―」(『東海女子短期大学紀要』二五、一九九九)、同「遼祭山儀考」(『東海女子短期大学紀要』二六、二〇〇〇)など参看。
- (8) 同じ『南齊書』卷五七、魏虜伝に次のように見える。
 仏狸破梁州・黄龍、徙其居民、大築郭邑、截平城西為宮城、四角起樓、女牆、門不施屋、城又無壘、南門外立二土門、内立廟、開四門、各隨方色、凡五廟、一世一間、瓦屋、其西立太社、……
- (9) 前掲拙稿「北魏における西郊について―鮮卑拓跋部の二つの祭天形態が語るもの―」第六章
- (10) 村田治郎「満洲・薩満教の建築」(『満洲建築雑誌』一一―三、一九三二)
- (11) 小長谷有紀氏はテントが向く方角について、『モンゴル草原の生活世界』第六章(一九九六)で「モンゴルの民俗方位では、南東を「前」といい、同時に「南」と見立てるのである。したがって、正確な方位よりも約四五度ずれているのがふつうである。ただし、モンゴル国の西部アルタイ山麓では、東を「前」と見立てる。アルタイ山系を背にしてゲルを立てると、ちょうどウランバートルを前に見るような向きになるのである。この場合は、九〇度ずれていることになる。」と述べている。
- (12) 『中国自然地理図集』第二版、盛行風向(一九九八)
- (13) 秋葉隆氏は、大興安嶺畢拉河(ベラハ)上流のオロチョンがテントの入口を普通東または南に向け、夏は北に向けたことを記録している。(前掲『満蒙の民族と宗教』第二章第一節三)
- (14) 『後漢書』卷九〇、鮮卑伝
 鮮卑者、亦東胡之支也、別依鮮卑山、故因号焉、其言語習俗、与烏桓同、
- (15) 『三国志』魏書卷三〇、鮮卑伝注
 魏書曰、鮮卑亦東胡之余也、別保鮮卑山、因号焉、其言語習俗、与烏丸同、
 テント内は仕切こそないが、用途によって位置がはっきりと定めら

- れている。また各位置の上位下位なども習慣的に決まっている。そうした位置には地域によって若干差異が見られるが、しかし最奥部が最上の位置であることは古今どこも変わらない。昔はそこに貴重品を納めた箱などやシャマニズムの神像が祭られ、やがてラマ教が広まるとその祭壇が置かれるようになった。遊牧民のこうした生活習慣について記録したものは甚だ多い。次にその幾つかを挙げておく。蒙古研究所編『蒙古風俗の研究と解説』(二)第七章(『蒙古』一二八、一九四三)、D・マイタル『草原の国モンゴル』加藤九祚訳、第三章(一九八八)、徐世明「昭烏達・卓索図蒙古族信仰与習俗」(『王公補遺・蒙古風情拾粹』所収、一九九三)、前掲小長谷氏「モンゴル草原の生活世界」第六章など。
- (16) 前掲徐氏「昭烏達・卓索図蒙古族信仰与習俗」起居など。
- (17) 鳥山喜一「金初に於ける女真族の生活形態」第二章(『小田先生頌寿記念朝鮮論集』所収、一九三四、『満鮮文化史観』所収、一九三五)
- (18) 『旧唐書』卷一九九下、北狄伝、靺鞨
 無屋宇、並依山、掘地為穴、架木於上、以土覆之、状如中国之塚墓、相聚而居、夏則出随水草、冬則入处穴中、
- (19) 『隋書』卷八一、東夷伝、靺鞨の条にはこうある。
 地卑湿、築土如堤、鑿穴以居、開口向上、以梯出入、
- (20) 三上次男「古代東北アジア諸族、とくに挹婁人における地下式住居」(『石田英一郎教授還暦記念論文集』所収、一九六四、『古代東北アジア研究』所収、一九七七)
- (21) 小堀巖「満洲族薩満の祭祀を見て―黒河省瑯瑯県大五家子村の場合―」(『民族学研究』一四―一、一九四八)
- (22) 池内宏「金史世紀の研究」(『満鮮史研究』中世第一冊所収、一九四三)
- (23) 大貫静夫氏は、東北アジアの竪穴住居について、「単に防寒用の住居ではない。北方では夏でも夜は冷えることがあり、夏の仮小屋に竪穴住居を用いることは現在でもある。また通年居住する例も、冬のみ例も民族誌に見える。機能を一義的に決めるのは慎重にすべきである」と述べている(『東北アジアの考古学』付編二、竪穴住居の変遷

先がかつてテントや竪穴式住居で生活し、北アジアに吹く強い西風を避け、また採光の便も考慮して扉を東方に向けたことに由来したと考えられる。すなわちテントや竪穴式住居はごく単純な構造をしており、扉を入るとちょうど正面が住居の最奥部となる。そのため住居の西部が最も上位置とされ、シャマニズムの祭壇や神位神像はじめ重要なものがそこに置かれることになった。そして常にその前で西向して儀式が行われると、やがては西の方角や西という位置までも神聖視されるようになった。

満人の家屋は中国建築の影響を受けると、扉を南側に設けるようになったが、しかし主な炕は依然として家屋の西側に設けられ、祭儀も西壁に向かって行われた。それは昔の生活習慣に宗教的意義が加わって、厳しい形式として伝承されたために違いない。

ところで、拙稿では満人の西方尚尊習俗の由因を考えてきたのであるが、三章四章で述べたように、住居の扉を東に向ける必要は、実は大興安嶺以西に活動する遊牧民の方に一層強くある。草原や沙漠地域には強い風が吹きぬけるからである。歴史記録にも、遊牧民族が西を尊んだという記事が非常に多い。その遊牧民族の西方尚尊についても勿論、テントの東向は主要要因としてあったと考えられる。但し遊牧民族の西方尚尊にはまた祭天儀式なども大きく関係したようで、草原遊牧民の習俗と満人の習俗とを必ずしも一律に捉えることはできない。草原遊牧民の西方尚尊問題については、別稿に於いて詳論する予定である。

註

- (1) 西壁での祭祀の記録は少なくない。主なものをあげると、帝室については『欽定滿洲祭神祭天典禮』六巻が、旗人については索寧安撰『滿洲四礼集』中の『滿洲祭天祭神典禮』一巻がある。調査研究では石橋丑雄『北平の薩滿教に就て』(一九三三)、赤松智城・秋葉隆『滿蒙の民族と宗教』(一九四二)の両書が最も詳しい。また新しいところでは覃光広等編著・伊藤清司監訳『中国少数民族の信仰と習俗』上巻、東北・内蒙地区(一九九三)も参考になる。

王宏剛・金基浩『滿族民俗文化論』(一九九三)は、満人が西壁を尊び西炕を上座とする習慣が現在も続いていることを述べ、シャマン教の「太古人類には方角を弁別する能力がなかったので、天母神は四方の女神を地上に遣わした。そのとき西方の女神が真つ先に地上に着いたため、人類は西の方角を最も早く認識するようになった」という神話を紹介している。

なお満人や漢人の住居の歴史については、八木契三郎『支那住宅志』(一九三二)といった专著がある。

- (2) 趙展『滿族文化与宗教研究』前言(一九九三)

アレクセイ・オクラードニコフ氏は、遺物などをもとにしてツングースの南下を説いたが、その南下途次での生活形態に諸相のあったことを述べている。『シベリアの古代文化—アジア文化の「源流」』(加藤九祚・加藤晋平訳)第五章、一九七四)

- (3) 前掲赤松・秋葉氏『滿蒙の民族と宗教』第四章第二節

尚左尚右という概念が不安定なものであったことはよく言われる。たとえば箭内互『元朝牌符考』(『滿鮮地理歴史研究報告』九、一九二二、『蒙古史研究』所収、一九三〇)を参看されたい。

(4) 北方民族酋長の東向の例をいくつかあげると、遼の制度が最も顕著である。遼朝皇帝は常に東向して座し、よつて遼の官制は南北に分けられることになった。また『旧唐書』卷一九五、迴紇伝には、中国公主との結婚式で迴紇可汗が東向したことが見え、『北史』卷一三、后妃伝には、西魏に嫁す柔然主の女が東向して西魏の使いに接したことが

催された月祭や大祭でも、同じ神が西壁、北壁に祭られた⁸⁰⁾。

宮廷で朝夕に祭られた神々は、広く満人が信仰していた神である。

この中に祖先神が見えないのは、帝室の祖先神は中国的な儀礼整備によって、祖廟の方で祭られた為であろう。

ただし朝祭と夕祭は別の祭りであるとはいえ、朝と夕とを比べれば、朝祭の方が上位にあつたと考えられる。そして朝に祭られた神と、夕べに祭られた神とを比べると、そこには明らかな区分がある。朝祭の神は、みな仏教の神と漢人の信仰した神である。夕祭の神は、全部シヤマニズムの神である。各シヤマニズム神の説明は省くが、いずれもツングースやモンゴル系民族が古来深く信仰してきた神ばかりである。もちろん朝祭の釈迦、観音、関帝も、仏教や道教のままの神ではなく、昔シヤマニズムの中に取り込まれて、シヤマニズム神として信仰されているのであるが、しかしそうはいつでも仏教や道教本来の信仰がここから徐々に広まり、北方民族古来の神々がおされ気味なのは疑いようがない。中国に入った北方民族に、中国文化の影響は強烈であつたのである。

そうしてみると、北京に住む満人らが仏教神を西壁に祭つたのは、満人シヤマニズムの衰退と仏教化の結果に違いない。弱体化したシヤマニズムの神々は、北壁の方に追い遣られてしまったのである。石橋氏の見た北京満人の独特な祭儀情況は、おそらく帝室の祭祀から巷に広まったもので、まだ地方には見られない京畿シヤマニズムの新風潮であつたのではなからうか。

西壁に加えて北壁が使われたことは、また祭儀における方向の問題を解く重要な鍵ともなる。北壁が使われたのは、満人の宗教観念とし

て北が西に次ぐ位置であつたからであろう。しかし始めに述べたように、西炕に次ぐ位置は北炕でなく南炕であつたわけで⁸¹⁾、それなのに神を祭る場所が北炕北壁であるというのは、北炕という場所が神聖視されているのではないということである。つまり北壁が選ばれたのは、南方に向いているためと理解されるのである。南は日中の太陽の方向である。南方に向けば、太陽の運行を全て見つめることができる。見方を変えれば、南向は太陽のすべての力を得ることが形なのである。南を尊び南を向くということでは、北方民族よりも中国の方に多くの事例がある。皇帝の南面をはじめ、祭天の神位や祖廟の神龕の南向、そして主だった建築物は皆南を向いている。そうした事実を見れば、北壁に神を祭つたのは、中国の影響を受けたものではないかと推測される⁸²⁾。

北壁は南に向いているために尊ばれたとする考えに誤りがなければ、西炕西壁が尊ばれたのも、壁面が東に向いているためである。すなわち満人が祖先や諸神を祭るのに西壁を選んだのは、そもそも西という方角に何か神聖なものがあつたから尊ばれたのではなく、家屋の西辺に置かれた神位神像の東向が作用したのである。西の方角や位置を尊ぶ思想は、やがてそうした所から派生したのであろう。

結論

以上述べてきたことを簡約すると、次のとおりである。

満人が家屋内の西壁、西炕で先祖や諸神を祭つたのは、彼らの祖

であったことが分かっている⁸⁹⁾。上京近くにあった女真住居の多くも、このころ既に中国様式を採りこんで建てられていたのではなからうか。扉の位置を旧来の東から南に変えることには、たいして抵抗はなかったであろう。家屋の形を中国式家屋に改めれば大きなメリットが得られるからである。つまり柱が高く壁の大きな切妻形家屋には、多くの窓を設けることができるのである。それは採光と通風などを大きく改善してくれる。女真の家屋が金のころ急速に中国的家屋に変化したのは、きっとそうした利便を知ったからであろう。

近世満人の家屋は大型化し、正房の他に左右の廂房を建て、門には門房を設けて、家屋の外形は漢人のものと何も変わらなくなった。しかし正房の扉が南に移っても、主要な炕と祭壇は必ず正房の西室、西壁に設けられた。遥かむかし住居最奥に設けられたときから今日に至るまで、シャマニズムの祭壇が置かれる位置は、極めて頑固に守られ続けたのである。

七 満洲族の北壁での祭祀

満人の祖宗板子は西壁以外に祭られることもあった。北京の調査を行なった石橋丑雄氏は「満人の家では祖宗板子は北壁に祭られるのが普通で、西壁には仏教系の神位が配されている」と述べている⁹⁰⁾。また黒竜江省愛輝の南にある大五家子屯を調査した小堀巖氏は、その地の代表的な正房のプランを記録し、祖宗板子とその西室の西壁に二つ、北壁に一つ、東室の東壁に二つあったことを示している⁹¹⁾。

しかしながら主な祖宗板子は西壁に祭るのが、最も普及した形であった。遼寧、吉林、黒竜江省など所謂満洲地域を広く調べた秋葉隆氏は、「神板子は西壁に設けられ、祭っている神を仏爺と称する家もあって、祖霊信仰と仏教との結合を示している。神板子の近くに満洲文字で書かれた家譜を奉安している家もある。また神板子の傍らには媽々口袋などと呼ばれる、おそらく仏教、道教の影響を受けた子孫繁栄の神が祭られたり、さらに西方の軒下には土地、観音、関帝の神の神像が吊り下げられることがある」と述べている⁹²⁾。また斉齊哈爾の北の三家子屯を調査した金啓琮氏は、西炕が供神供祖の尊い場所である事を記しているが、北壁の祭祀については何も触れていない⁹³⁾。また小堀氏が記録したシャマンの祭儀は、西炕の前で西を向いて行われている⁹⁴⁾。

清代、満人の中には徙民政策などによって遠く離れた土地に移動した人々が少なくなかった。きっとそうした所から伝統的習俗が雑多に変化し、祖宗板子が北壁や東壁にも設けられることになったのであろう。それでは石橋氏の北京の調査結果に、西壁にはシャマニズム神でなく仏教系の神が祭られているとあるのはなぜか。この問題については、清朝宮廷で行なわれた祭祀を見れば答えを得ることができる。

清朝皇室の様々なシャマニズム祭祀は、主に宮廷内の坤寧宮で行われた。その日常の祭祀には朝祭と夕祭と呼ばれるものがあり、朝祭は西壁で、夕祭は北壁で行われた。朝祭では西炕に釈迦牟尼仏が置かれ、西壁上に観世音菩薩と関聖帝君の画像が懸けられて、皇帝は西向してこれを拝した。また夕祭では北炕、北壁に穆哩罕神、画像神、蒙古神等々の神が南に向けて並べられ、皇帝は北向して拝した。より盛大に

話なのであろう⁸⁸。とはいえここに、遷徙常ならぬ生活から定着農耕生活に移ったと云っている点は重要で、女真がかつて移動の生活を送っていた事を伝えようとしたのであろう。前掲世紀の文に『旧唐書』韃靼伝の文が援用されたのも、同じ意図によるものであろう。また『新五代史』にも次のように書かれている。

女真善射、多牛・鹿・野狗、其人無定居、行以牛負物、遇雨則張革為屋、

(卷七三、四夷附録二所引胡嶠『陷虜記』)

これらの記録によれば、女真が昔移動性の狩猟牧畜生活をしていたのは確かで、そのときにはテントや簡易な家屋が用いられたに違いない。また上の記事からは、金朝建国のかなり前から女真が固定家屋を用いていたことも推定できる。

ただ一口に女真といっても、多数の部族に分かれていたわけで、各部族はおそらくそれぞれに様々な形態の生活を送っていたであろう。ある部族は農耕を専らにして固定住居を持ち、ある部族は常にテントを用いた狩猟を行ない、また中には固定住居を持ちながら、ある時期ある状況下でテント生活を併行した部もあったであろう。金代完顔氏が諸部族を統帥して遼を駆逐し、強力な騎馬兵団で北宋を倒したことからすれば、満洲で大掛かりな牧畜が行われていたのは明らかで、金代なおもテントや仮設の住居を使用する女真は多かったと考えられる⁸⁹。女真の住居の東向は、テントの時代から家屋の時代まで、かなり長期にわたる習慣であったとみてよい。

満洲の西に接する大興安嶺中には、今もオロチョン族など古い狩猟牧畜民の姿をとどめる民族が生活しているが、そのオロチョンはシャ

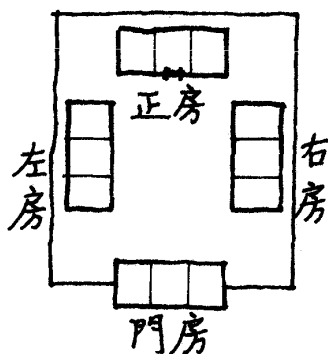
マニズム祭祀のときテントを東向きに建てる。そして神位神像をテント最奥部に置き、入口の方に向ける⁹⁰。

さて女真は狩猟を主とした時代は山谷に依ることが多かったが、農耕を主とするようになると平地に出るようになった。それは同時に農耕の盛んな中国文化に親近することでもあった。女真の住居の形が竪穴式から近世のような土壁を持つ切妻形へと変化したのは、これを契機としたものであろう。もと家屋の東側にあった扉が南側に移されたのも、この時であろう。中国建築では、普通扉を南の壁に設ける。また漢人家屋のように左右の廂房を設けようとするれば、正房の扉は当然南側に付けなければならない(図五)。

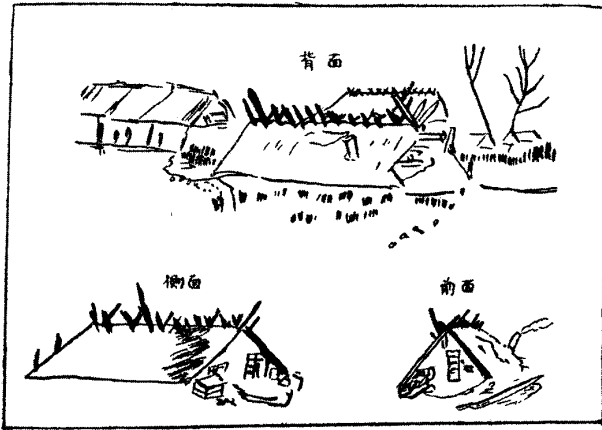
こうした変化は金以前から徐々にあり、金の南方への進攻とともに急激に進んだのであろう。金の太宗のとき上京会寧府を訪れた宋の使者は、その付近の家屋について、

一望平原曠野間、有民居千余家、星羅棋布、更無城郭、里巷率皆背陰向陽、

図五 漢人家屋



と述べている。「陰を背にし陽に向かう」というのは、家屋が陽光を受けるように東西に長かったことを窺わせる。また南向すなわち扉を南側に持った建物であったようにも受け取られる。金上京の宮殿は、城址調査によって、中国的プランで築かれ、南に門を開いた壮大なもの



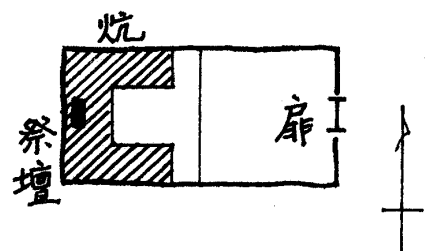
図三 満人半地下式民家（小堀巖氏スケッチ）

満人の住居は固定の建築物であり、しかも山がちな土地にあったから、草原遊牧民らのテントに比べれば、風に対する強度はそう問題でない。それでも扉が東南に向けられたのは、やはり寒風を避けるため、そして窓のない屋内に光を採り込むためであったであろう。また、そこに太陽崇拜が関与していた可能性もある。

と論断した⁴⁰。その三上説に従えば、『三朝北盟会編』や『大金国志』に記された家屋は、やはり半地下式のつまり竪穴式住居と考えられる。竪穴式であり、壁が低く屋高も低いということは、女真家屋の屋根は二つの長方形の面を合掌させたような単純な形であった可能性が高い。とすれば、扉は屋根の面に作れない。扉の位置は自ずと両屋根と直角の面に設けられたはずである。そして『三朝北盟会編』や『大金国志』は、門扉が東もしくは東南についていたと云っている。そうするとこの建物は東西に長く、内部構造が簡単で、扉を東側に持っていたと推定される。要するに昔の満人家屋の扉は東側にあったのである。そうした形の家屋は、僅かではあるが後世にも伝えられたようで、小堀巖氏が黒竜江省大五家子屯で見た満人の半地下式民家のスケッチを図三に載せておく。これは全く想像どおりの形をした竪穴式の住居である。

こうした満人の住居東向と西壁での祭祀の関係も、遊牧民の場合と同じように考えられる。すなわち古い時代の女真の東向した家屋では、西側部分が最も奥まった所となり、そこに炕が設けられる（図四）。家屋の最も奥であり、かつ温暖快適な場所であれば、そこが最上の位置として家長の座、祭壇の置き場所となるのは必定である。

図四 満人竪穴式家屋想像図



六 女真家屋の時代的变化

金代から更に時代を遡ると、女真はテントを用いた狩猟生活を送っていたようである。『金史』世紀には前掲の記事に続いて、女真完顔氏が祖先献祖の頃から農業を行ない、家屋を構えるようになったことが記されている。

（始祖）子献祖、諱綏可、……遷徙不常、献祖乃徙居海古水、耕墾樹藝、始築室、有棟宇之制、人呼其地为納葛里、納葛里者、漢語居室也、自此遂定居于安出虎水之側矣、

（『金史』卷一、世紀）

海古水や安出虎水とは現在の阿勒楚喀河のことで、女真の古い根拠地である。しかし献祖は始祖から数えて四番目の首長とされるものの、その実年代は特定できない。つまりこれは歴史的事実ではなく、女真が昔この流域で農業を始めたのを、献祖の事蹟という形に作り上げた

果、游牧国家では、首長はテント内で東向して座し、臣民は西向して首長に謁見する習慣が生まれた。またシャマニズムの神像がテント最奥部に東向きに置かれたことから、テント内での祭儀は西向して行われることになった。游牧国家最高の宗教祭は年幾度か開かれる祭天儀式であったが、游牧民個々は、毎日寢食の場で親しく諸神や祖先を祭った。毎日テントの西部で西向して神祖を祭れば、西方が尊ばれるようになるのは自然の理である。西方を尊ぶ思想は現代モンゴルの人々の間にもあるという⁹⁸⁾。テントの東向はその主要な由因の一つである⁹⁹⁾と考える。

五 女真家屋の東向

満人が家屋の西室西壁に祖先や諸神を祭ったのも、その祖先が住んだ古い時代の住居の形状と、その扉の位置から由来したものと考える。ただし東西に長く、扉が東南位置に南を向いてある清代満人の家屋からは、それは分からない。この問題を解くには、満人の祖先が暮らした住居を知る必要がある。そこで次に金代女真の家屋に関する記録を引いてみると、

屋高数尺、無瓦、覆以木板、或以桦皮、或以草綢繆之、墻垣籬壁、率皆以木、門皆東向、環屋為土床、熾火其下、与寢食起居其上、謂之炕、以取其煖、

其居多依山谷、聯木為柵、或覆以板与桦皮、如牆壁、亦以木為之、

〔三朝北盟會編〕卷三

冬極寒、屋纔高数尺、独開東南一扉、扉既掩、復以草綢繆塞之、穿土為牀、熾火其下、而寢食起居其上、

〔大金国志〕卷二九、初興風土

とある。ここに記された家屋には炕があり、屋根が木板や草で葺かれている。これらは満洲建築の特徴である。しかし近世満人の建築と明らかに違う所がある。壁が土壁ではなく、木の皮や板で出来ており、そして家屋の高さがわずか数尺、つまり一メートルほどしかない点である¹⁰⁰⁾。この説明が示している形状は、日本の古代にもあったような、竪穴式住居である。

金代女真の祖先の事蹟を綴った『金史』世紀を見ると、

〔始祖〕子猷祖、諱綏可、黒水旧俗、無室廬、負山水坎地、梁木其上、覆以土、夏則出随水草以居、冬則入处其中、遷徙不常、

〔金史〕卷一、世紀

という一段があつて、ここには祖先の住んだ家屋が「地に穴を掘つて」作られていたことが記されている。この文中「黒水」から「其中」までは、実は『旧唐書』の黒水靺鞨伝から援用されたものであるが¹⁰¹⁾、こうした記述をもとに、ツングース系民族には穴居の習俗があつたとする説が嘗てあつた。穴居とは地下式の住居を用いた生活で、その住居というのは、地中深く掘った穴の上に木の梁をわたして土で蓋い、そして多段の梯子を立てて、天井の穴から出入りするという構造になつていた¹⁰²⁾。

しかし三上次男氏は、「穴居生活は挹婁、勿吉、黒水靺鞨など古アジア族にのみあつたもので、ツングース系諸族には認められない。考古学から見ると、満洲地域には太古から近世まで竪穴式住居の跡が多い」

(蒙古) 其居穹廬、……主帳南向、

(『黑韃事略』)

其営必挾高阜、主將駐帳、必向東南、

(同右)

などである。必ずしも東南ではなく東や南とあるのは、風向きは地形によつて変化するからであろう。また風向きを観察した者の方向感覚の影響もあるであろう。たとえば現代モンゴルには、東南を南と見立てる習俗がある。おそらくそうした習俗は古来あったものであろう。そうしてみると南向というのは、実は東南向であつた可能性もある⁹⁰⁾。

ただこの中で匈奴だけは違っている。單于の座は北を向いていたことである。ということは、テントの入り口が北向していたことになる。しかし匈奴だけが他の民族と違っていたとは考え難い。これはきつと風向きの変化に因るものであろう。遊牧民は良好な食草を求めて転々と移動する。但し大草原の地形は必ずしも平坦ではない。砂漠、河川、山岳等々複雑な起伏があり、それによつて風向きが様々に変わる。おそらくこの匈奴の習俗が観察されたとき、單于の本営はたまたま南からの風を受ける地に在つたのであろう。モンゴル高原各地の季節ごとの風向きを調べたところ、確かにそうした地域がある。例えば陰山北方の二連浩特の主な風向は、夏季は南東であるが、春と秋冬には南西の風が吹く⁹¹⁾。強い風が南西から吹けば、テントの入り口は反対の北東、大まかに言えば北に向けなければならないのである⁹²⁾。このように理解すれば匈奴單于北向の問題は解決できる。

右の記録には前章に述べた鮮卑のテントに関するものがないが、鮮卑の習俗は烏丸に同じと史書は伝えている⁹³⁾。鮮卑のテントも東に向けられていたに違いない。否、モンゴル高原の草原沙漠地域では、古今全ての民族がテントを東に向けたと見てよいであろう。

右の記録にはもう一つ注目すべきところがある。『後漢書』に「穹廬為舍、東開向日」とあり、『周書』に「牙張東開、蓋敬日之所出也」とあることである。北方民族が太陽を強く崇拜したことは顕著な事実である。とすれば、テントの東向には太陽崇拜との関係も考えなければならぬ。

北アジアに於て冷氣を運ぶ北西の風は絶対的な自然条件である。したがつてテント東向の根源的理由が、風にあつたことは疑いがない。しかしながら風を避けた扉の向きは、ちょうど朝日の昇る方角に一致する。そしてその扉からは、日の出と同時に朝の光がテントの中にさし込む。太陽を尊んだ民族にあつては、そうした所からテント東向と太陽信仰とを関係させる思想が生まれるのは寧ろ当然である。常時とは言えないが、とくに祭りの日などに北方民族らが宗教的側面を強く意識してテントを東に向けたことは十分に考えられる。

さて今日モンゴルでゲル、中国でパオと呼ばれるテントの構造は、実にシンプルである。木製の円筒形フレームを組み立て、そこにフェルトの布を被せたもので、内部空間に目立つた仕切がない。このテントの中で一番の上座は最奥部で、そこは主人の座とされ、主要な家財、また大切な神仏の壇などが置かれる⁹⁴⁾。最奥の場所が上座とされるのは、やはり円形の空間中でそこが最も扉から離れ、かつ扉に対面する位置だからであろう。北アジア史上の遊牧民族らが用いたテントの内部構造も、今日とほぼ同様のものであつたと思われる。とすれば、西の方角や位置に対する尊崇の説明には、もう多言を要しないであろう。テントが東に向けられれば、テントの奥は自ずと西側となる。

こうして風を防ぎ、また朝日を礼拝できるようにテントを建てた結

ている。

鮮卑拓跋は、清代満人よりも一〇世紀以上前に栄えた民族である。そして満人は農耕を主としたツングース系民族であり、鮮卑は遊牧を主としたモンゴル系の民族であつて、生活形態もかなり異つていた。しかし満人も時代を遡れば、その祖先らは狩猟を主な業とし、大興安嶺の東麓で鮮卑と接して生活していたのである。そうした位置関係からすれば、両者の宗教観念や儀式習俗に共通部分があつても不思議ではない。それぞれのシャマニズム文化は互いに影響しあつて育成されたのである。

村田治郎氏は、高句麗各部が祀つた宗廟と称する建物を、満人のシャマニズムの神堂と同様のものと見る解釈を述べているが⁹⁰、鮮卑は高句麗のすぐ西隣に在つた民族である。建築の様式に違いはあつたかもしれないが、北魏宮廷の祠屋も満人の神堂と同類のものと見てよいように思う。

こうしたシャマニズム文化の連関を考えると、祖先神や諸神を西の方角や位置に祭つたのは、鮮卑、満人に限らず、北方の諸民族間に広くあつた事と推測される。

四 遊牧民テントの東向

西を尚尊する習俗が、北方諸民族の間に広くあつたとすれば、そうした習俗を生む、しかもどの民族にも共通した何かがあつたと考えなければならぬ。そうしたものを捜せば、確かにある。それは住居の

東向である。西方尚尊にそれがどう繋がるかは、北方民族の住居の構造と、そこに住む生活を見ればすぐに理解できるであろう。

モンゴル高原も満洲地域も極めて寒冷な地域であり、強い北西風が吹く。したがつてこの地域に住居を設けるには、どうしてもその風を避ける工夫が必要となる。

モンゴル高原の場合、遊牧民らはテントの扉を必ず東南に向ける。テントの扉を風下に向けるのは、風をはらんで壊されるのを防ぐため、テントを建てるときの常識である。しかも扉を東南や南に向ければ、明るい光を暗いテント内に入れることができる。

これは歴史上の遊牧民族にもはつきりと見て取れることで、諸民族のテントの向きを史書からひろつてみると、

(匈奴) 单于朝出营、拜日之始生、夕拜月、其坐長左而北郷、

(『史記』卷一一〇、匈奴伝)

(烏丸) 魏書曰、……以穹廬為宅、皆東向、

(『三国志』魏書卷三〇、烏丸伝注)

以穹廬為舍、東開向日、

(『後漢書』卷九〇、烏丸伝)

(突厥) 可汗恒處於都斤山、牙張東開、蓋敬日之所出也、

(『周書』卷五〇、異域伝下)

(契丹) 契丹好鬼而貴日、每月朔旦、東向而拜日、其大会聚、視国事、

皆以東向為尊、四樓門屋、皆東向、

(『新五代史』卷七二、四夷附録二)

遼俗、東嚮而尚左、御帳東嚮、

(『遼史』卷四五、百官志一、北面諸帳官)

は左を尚び、祭祖祭神に関しては明代の尚右を継承したのであろうか。尚左尚右というのは実に曖昧な表現である。仮に記録に「尚右で西を尊んだ」とあったとしても、実際に尚右思想で西を尊んだのもあれば、西を尊んでいるのを見た記録者が、勝手に尚右と解釈して記したものもあったかもしれない。また尚左尚右というのは制度として決められたものではなく一種の思想、習慣であるから、その時代の何時何事においても必ずそうであったわけではない^⑤。しかも尚左尚右の基になる方向は必ずしも南とは限らない。中国皇帝の場合は南向であるが、ところが北方民族の首長は大概東向していたのである^⑥。したがって尚右の俗と言うだけでは不明瞭である。それを言うにはまず基本となる方向を示さなければならぬ。そして金より清に至る間の、女真の尚左尚右の変遷に関する説明がほしい。

三 鮮卑の西方尚尊

先人の説に満足できないのであれば、他にどのような理由が考えられるのか。その答えを見つける糸口として、筆者は鮮卑の記録に注目する。北方民族の大多数は天を祭るとき西に向かって儀式を行ったが^⑦、鮮卑拓跋には更に次のような西と関係する記録があるのである。

自仏狸至萬民、世増雕飾、……正殿西又有祠屋、琉璃為瓦、

(『南齊書』卷五七、魏虜伝)

仏狸とは北魏第三代太武帝、萬民は第五代献文帝のこと、つまり当時の都平城の正殿脇には琉璃瓦でふかれた立派な祠屋があったとい

うのである。中国式宮殿に必ず配置される祖先や社稷を祭る廟屋は別にあつたから^⑧、ここにいる祠屋はそれらとは別の神を祭つたものである。そうするとこれはシャマニズムの神位神像を安置した祠屋であつた可能性が高い。シャマニズム儀式では大抵、祖先や天地自然の神靈を象つた神位や神像が用いられた。遊牧民族は常にそれらの神像を、神車と呼ばれる馬車に載せていた^⑨。したがって遊牧民が宮殿に居住した時には、当然それらの神像は尊い場所に置かれることになつたであろう。祠屋について詳しいことは分からないが、祠屋が正殿の西に設けられたのは、やはり西方が神を祭るべき尊い位置であつたからであろう。そしてそこには常に身近に置くべき大切な神が祭られていたはずである。鮮卑にとつてとりわけ大切な神とは、シャマニズムの神に相違ない。

また北魏の五帝に仕えた老王の言葉に、こうしたものがある。

東陽王丕曰、臣与尉元、歷事五帝、雖衰老無識、敢奏所聞、自聖世以来、大諱之後三月、必須迎神於西、攘惡於北、具行吉礼、自皇始以来、未之或易、

(『魏書』卷一〇八之三、礼志三)

これは文明太后の死去に当つて、孝文帝の服喪が検討されたときの発言である。東陽王が言つた神とは、話の内容からすればきっと死者の靈魂をさすのであろう。そうするとこの頃、鮮卑が西を神靈を迎え祭る為の尊い方角としていた事が明らかである。

こうした北魏の宗教習俗は、満人のそれと実によく似ている。西の位置や西の方角を尊とび、そこに祖先神や諸神を祭つたところが同じである。首長がそれらの神々をすぐ身近な場所に祭つたことも共通し

その西炕の壁には、祖先や諸神を祭る祖宗板子、神板子などとよばれる神棚が一つもしくは二つあった。その近くにはまた、様々な神像や神具が置かれることもあった。祖先や諸神を祭る満人伝統のシャマニズム儀式は、西炕の前で祖宗板子の方を向いて行われた。その方向はつまり西である。かつて儀式には必ずシャマンが呼ばれ、盛んに跳舞が為されたそうであるが、次第に家人だけで執り行われることが多くなったという。

清朝帝室でも勿論西壁に於ける祭祀が行なわれたが、それについては後述する。

二 既説に対する疑問

さて祖宗板子などの神棚や神具はなぜ西壁に設けられたのであろうか。この問題についてこれまでの研究から得られた説は二つあった。

まず趙展氏によれば、「満人などツングース系民族はバイカル湖に発祥して東方に進んできた可能性が高い。満人が祖先崇拜で西方を尊ぶのは、バイカル湖周辺が発祥の地である証である」と言う。つまり満人の西方尚尊は、祖先発祥の地を尊んだことに始まるというのである^②。

バイカル湖は満洲から見れば西北方になるが、概して西と見ることはかまわないであろう。しかしながらツングースの東方への進出移動という、歴史からはみ出るかもしれない遙か昔の記憶がこの近世にまで続くものであろうか。

また狩猟民族ツングースが東に移動したとき辿ったであろうバイカ

ル湖から満洲の間には、広大な森林、山地、幾つもの大河が横たわっている。ツングースは移動して、その途次の各所に留まると、その土地土地に依じて漁労、牧畜などの新たな生活にも就いた^③。満人はそうした中で最も遠い地に移動し、しかも農耕を営むようになった。そうすると新たな土地で新たな生活に就いて代を重ねていけば、そこが彼らの新たな故郷となったのではなからうか。人間が望郷の念を持つ事は認める。しかしながら遙かに満人とバイカルとを結びつけることには、いささか承服しかねる。

つぎに秋葉隆氏や金啓孫氏によれば、それは尚右の俗の一形態であるという^④。尚右というのは中国人の思念に基づいて言えば、天子が南面することを基準として、天子から見て右、つまり西側を左よりも上位とする思想である。満人は家屋をおおむね南向きに建てたから、尚右思想によって神棚が西の部屋に置かれたというわけである。

左と右のどちらを上位とするかは、王朝によって異なる。『日知録』巻二九の「東向坐」や『陔餘叢考』巻二「尚左尚右」などをもとに、大体の所をまとめると左表のとおりである。

戦国	右
秦	右
漢	右
六朝	左
北魏	左
唐	左
宋	左
遼	左
金	左
元	右
明	左
清	左

これによれば清朝は尚左であった。それなのに両氏が尚右と言うのは、入関以前すなわち明代の満人が尚右の俗を持っていたからだという。しかし家屋の西室西壁に神棚を祭ったのは、一般の満人だけでなく、清朝帝室に於いてもそれは同じであった。そうすると清朝は公に

神祖を西壁に祭った満洲族の習俗について

— 北方民族の住居の東向と西方尚尊の関係 —

今井秀周
(東洋史学)

- 一 満洲族の家屋西壁での祭祀
 - 二 既説に対する疑問
 - 三 鮮卑の西方尚尊
 - 四 遊牧民テントの東向
 - 五 女真家屋の東向
 - 六 女真家屋の時代的变化
 - 七 満洲族の北壁での祭祀
- 結論

一 満洲族の家屋西壁での祭祀

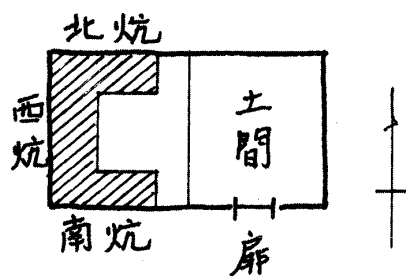
清代の女真いわゆる満洲族には、祖先や諸神を家屋屋内の西壁に祭り、西向して拝する習俗があった。拙稿では、なぜそこで西壁が選ばれたかを考える。

満洲族が家屋西壁で祭祀を行ったのはよく知られた事で、清代の文献や民国期に行われた調査などにその関係記録を見ることができ^①。

初めにそれらによって西壁の周辺を説明しておこう。

清代満洲族（以下満人という）の家屋正房のプランは、一般的に図一のようなになっている。家屋は東西方向に長く、扉は東南位置に南向してある。満人の家屋全体から見れば、扉のある土間を中心にして東西に東室と西室を持った形が多いが（図二）、それは漢人家屋の形式に倣ったもので、家屋東南に扉が偏在するのが、満人家屋の伝統的な形である。扉のある南側は広い庭になっており、富裕な満人の中には、庭に祖先や諸神を祭る神堂を建てる家もあった。

図一 満人家屋正房一



図二 満人家屋正房二



正房に入ると、西室がいわゆる居間兼寢処であり、炕がその部屋の北と西と南部に設けられている。炕とは朝鮮というオンドルで、満鮮地域に特有の床暖房設備である。満人は家の中で西炕を最も尊い場所とし、客人があるとここに迎え入れた。或は尊い場所であるから、客人でもここには座らせないという家庭もあった。次に尊いのは南炕で、年長者の場所とされた。そして北炕は若い者の場所であった。